

どにも、それなりの歴史的意義があり、せっかく獲得した余暇を誰かに絡め取られたり、掠め取られないようにしてきた。「闘い」があつたはずだ。そういつた「命がけの余暇論」が展開された時代には「豊かな社会」となつた今日とは異なる「余暇哲学・思想」があつたのだが、どちらかといえば第二章は今日から俯瞰した余暇論といった意味づけができるだろう。このことは日本余暇学会の冒頭に掲げられているメッセージが残念ながら氏に届いていないような気がした。だが、その日本余暇学会はこれにその看板を改めようとしている。これまでの「命がけの余暇論」がリセットされないよう、我々はこの財産を守っていかねばならない。

さて、第四章と第五章はこれまでの橋木氏のテーマとしてきた内容である。特に第五章では、働くことで生き甲斐を得られる人、働くことはほどほどで、余暇に生き甲斐を見

- 【一月】 5日 九十九歳の詩人柴田トヨ「くじけないで」累計百五万部到達
- 14日 二〇一〇年外国人の入国者、過去最高九四四万人、目標一千万人に届かず
- 19日 「るるぶ」もつとも発行点数の多い旅行ガイドとしてギネス認定
- 27日 二〇一〇年映画興行収入過去最高二二〇〇億円超え
- 【二月】 2日 日本相撲協会「八百長」問題特別委員会を設置
- 6日 大相撲春場所中止決定
- 14日 グラミー賞
- 松本孝弘ら日本人3人が受賞
- 19日 日本アカデミー賞「告白」四冠
- 【三月】 5日 東北新幹線「はやぶさ」デビュー
- 11日 東日本大震災発生
- 12日 九州新幹線全線開業
- 28日 米アカデミー賞「英国王のスピーチ」四冠

- 冠
- 【四月】 1日 上野パンダ公開開園前から二千人
- 4日 大相撲八百長闘争三人追放
- 14日 三月の外国人旅行者前年比七三%減、三五万人
- 22日 「高速道路休日千円」六月中止を閣議決定
- 【五月】 12日 J-T販売中のたばこ二三銘柄廃止を発表

二〇一一年 余暇関連ニュースダイジェスト

- 1日 一〇年度山岳遭難事故過去最多一九四二件
- 17日 スポーツ基本法成立
- 24日 小笠原諸島世界自然遺産に登録
- 25日 「平泉」世界文化遺産に登録
- 29日 総人口中六五歳以上二三%（前年国勢調査）出生率一・三九（二年ぶり上昇）
- 【七月】 1日 平日電力使用抑制
- 23日 島田紳助さん引退発表
- 【九月】 2日 二〇年夏季五輪に東京など六都市立候補
- 14日 WHOが日本人の六五%が「運動不足」と発表
- 22日 政府ユネスコに富士山、鎌倉を世界遺産に推薦
- 【十月】 5日 アップル創業者ジョブ氏死去
- 20日 成田空港併走滑走路運用開始
- 26日 全日空B七七八機、世界初就航
- 【十一月】 14日 B1グランプリ、「ひるぜん焼きそば」に決定
- 22日 旅行雑誌「旅」二二年三月で休刊発表
- 【十二月】 1日 流行語大賞「なでしこジャパン」
- 2日 年間ベストセラー「謎解きはディナーのあとで」
- 13日 二〇年五輪 東京招致閣議了解
- 【日付は日本時間】

日本余暇学会ニュース

発行所 日本余暇学会 発行人 藪田碩哉 発行日 平成二十四年一月二十一日

日本余暇学会、ツーリズム学会の統合へ向けて

藪田碩哉

二〇一二年が当学会にとつても会員諸公にとつても実り多い年であることを願っています。日本余暇学会は今年大きな転換を遂げることになるでしょう。ツーリズム学会との統合がいよいよ現実のものとなるうとしているからです。

両学会の統合は単なる便宜の問題ではなく余暇とツーリズムの理論的な関連性に基礎を置いていきます。基礎研究としての余暇学と応用研究としてのツーリズム学の相補的な関係を土台に余暇研究の深



化と拡大をはかることが統合のねらいです。幅の広い余暇現象の一つとしてツーリズムを捉えることによつて、実践の学であるツーリズム研究に理論的な基礎を提供することができま

ズムと他の分野（文化、福祉、教育、環境等）を余暇という基盤の上で関連させて考察するという視点も開けてきます。この統合を出発点として文化、スポーツ、生涯学習、余暇資源としての環境問題等との相互関連が追求され、より総合的な「レジャー・スタディーズ」への展望も開けてくるでしょう。

別の一面から見れば両学会が統合するべき客観的情勢が熟しているということができます。日本の社会は余暇問題への関心の低さを特徴としています。先進諸国の中では余暇の量的・質的水準は最低のレベルにあり、余暇意識の未成熟、余暇権の未確立、余暇制度の不備、余暇研究の未発達というマイナスの連

第77号

日本余暇学会事務局
〒191-0016 日野市神明1-13-1
実践女子短期大学 生活福祉学科藪田研究室
TEL/FAX 042-584-5428
e-mail info@yokagakkai.jp
Home Page http://www.yokagakkai.jp/
編集人・山田貴史

新入会員紹介

李洸玉(リクァンオク)
Namseoul 大学校

と信じます。統合への会員諸公のご理解とご支持を期待する次第です。

会費納入のお願い

平成23年度会費の納入をよろしくお願ひします。
口座番号: 00140-9-729065
加入者名: 日本余暇学会
会費: 一般会員10,000円
学生会員5,000円
*新しい学会パンフレットができました。
余暇に関心のある方に、入会をお勧めください。

去る十一月十八日、桜美林大学四谷キャンパスにて、十一月度レジャー・スタディーズ二〇一一年研究会が行われた。今回は、柴田邦臣氏（大妻女子大学社会情報学部准教授、日本社会情報学会理事）をお招きし、「染みわたる危機・縮みあがる社会・求められる『余暇』」というタイトルで、東日本大震災の情報ボランティアとネットワークをめぐる活動実態とその社会的意義についてお話し頂いた。

先の震災に際しては、家族や友人の思い出や記憶を形にとどめたモノとしての写真・アルバムが消失し、殊の外嘆かれた。それは、柴田氏の言を用いれば、写真・アルバムは、シャッターをきる瞬間、印刷アルバムに閉じる、という、人間が関わる段階が三つあり、その過程で二人以上の人間が関わる事が多く、結



果として「孤独な写真」というものはないためである。日本社会情報学会（J S I S）では、震災直後から、所属の若手研究者・大学院生によって災害情報支援チーム（B J K）を結成し、情報技術貢献の観点から、面積の半分が津波で浸水し、人口の半数近くが被災し、なおかつ情報インフラが貧弱な過疎地である宮城県亶理郡山元町の支援を行っている。そして、現在、柴田氏が主導して取り組んでいるのが、被災

「11月度レジャー・スタディーズ2011研究会」参加報告

染みわたる危機・縮みあがる社会・求められる『余暇』

歌川光一

写真をデータベース化し、被災者の写真検索を支援する「思い出アルバム」を「思い出アルバム・オンライン」である。具体的には、写真洗浄・デジタル複製・データ整理修正・アーカイブ作成などの一連の作業

が、地元の自治体をはじめ、ニフティ、フジテレビ、災害臨時FMりんごラジオ、全国のプロカメラマンとの幅広いネットワークによるサポート関係を通して、行われ、この活動は多くの被災者の方々に支持され、現在進行形で進められている。

最後に、柴田氏から、今回の震災は、過疎、物的・経済的・人的資源の不足、消費への傾倒、という「染みわたる危機」、生活に資源や余力、余裕を失い「縮みあがる」私達、を顕在化させたものであり、「余暇」について再考する必要がある、との課題を提起された。

二〇一一年十二月十六日、榊湯俊子先生（淑徳大学教授）をお迎えして「レジャー・スタディーズ研究会二〇一一年」の最終会が開催された。当日の講演では、「余暇をのぞき窓として近代産業社会を照射」したその古典的名著『企業社会と余暇』（一九九五年）をもとに、戦後日本における「余暇」の構図として、第一に、戦後日本における「余暇」はアメリカ型のマス・レジャーに象徴されるように「消費」と分かちがたく結びついてきたこと、第二に、これに関連して「余暇」が産業社会の「矛盾の吸収装置」として位置づけられてきたこと、という二点がまず指摘された。そのうえで第三に、一九九〇年代から現在までの新しい傾向として、「所得・労働時間の二極分化」をめぐる問題



を中心に出産率低下や過労死を招く長時間労働、他方では非正規雇用の増加や失業問題の深刻化に触れながら、失業・非正規雇用の増大に伴う「余暇の貧困化」傾向が指摘された。

要性が説かれた。具体的には、古典的近代に支配的であった狭義の雇用労働（賃労働）だけではなく、ボランティアや互恵的な地域活動さらには趣味や社交的活動など「雇用を超えた仕事」も含めて、「多様な仕事の配分が人間らしい生活にどのようなつながるか」ということを、企業の側からではなく、市民の生活感覚から考えていくことが重要であるという問題提起が提示された。

「レジャー・スタディーズ2011研究会」最終会を迎える！
「ライフスタイルの転換ともうひとつの働き方の模索」
小澤考人

以上の触発的なお話をうけて、質疑応答では、最近の若年雇用・高齢者保障など社会政策的な主題との関連をはじめ、新しいライフスタイルとの関連での第一産業の捉え直し、オルタナティブな働き方の一例としてコミュニティ／ソーシャルビジネスの可能性などをめぐり「労働と余暇」をめぐり現代の課題を中心に活発な議論がなされた。このことは今回の講演内容が、今後の社会を前提としてその改善を志向する「社会政策」的なワーク・ライフ・バランスにとどまらず、オルタナティブなライフスタイルや社会のあり方を展望する「社会構想」の射程を有するものであったことを示すといえよう。したがって今回の研究会は、まさに「労働と余暇」の関係をふまえて、労働の現状に見直しをせまる拠点として「余暇」が主題

読書案内

橋本俊詔著 「いま、はたらくと働くこと」

二〇一一年九月発行の第一章 偉人は働くということをどう考えたか
第二章 人間にとって余暇とは
第三章 働くことについて意欲あるのか
第四章 女性の労働
第五章 働かないということ
第六章 意欲をもって働くことは可能か
ここ数年、余暇学会の発表や論文投稿をみても、なぜ働くのか、なぜ休むのかといった「余暇哲学・思想」を主題としたものは少なくなりました。余暇論

を論じることが少なくなりました。日本余暇学会に代わって「はたらくこと」を主題にした単行本、「女性格差」、「日本の貧困」などを経済学的に論じてきた橋本氏の作品である。第一章はこれまで余暇学会でもたびたび発表してきた内容である。特に新しい発見があるわけではなく、はじめて労働とは何かを考える人にとって、多くの人が自分と同じ疑問にぶつかってきたことを確認するのに役立つだろう。第二章は、日本余暇学会編「余暇学を学ぶ人のために」など、余暇学会のこれまでの「成果」なども引用しながら論じているが、これまで多くの提言をしてきた氏の作品にしては、表層の議論を取り上げているにすぎない。筆者の論点は「余暇善用論」や「文化的」な余暇利用のすすめを批判する立場にあり、余暇は個人個人の考えに任せるべきという立場である。この意見に異論はないが、善用論な